

そうとする立場からして当然だが、『紅樓夢』以外の作品にはあまり言及がなされない。しかし、『紅樓夢』と、続書も含めたその周辺の作品とがいかなる連関にあるのかは、今後改めて検証される必要があるのではないだろうか。

いずれにせよ、明清時代の文学において、自我を綴ったり、テクストを組み立

教科書の体裁をとった文法書

矢放 昭文

てたりする際に、ジェンダー・イメージが格好の素材であったことは確かである。そして、その素材の扱いにおいて、『紅樓夢』はある意味では最も特徴的で、また最も過激な方法を示している。本書は、この空前の作品に一本の芯を通すために、賈宝玉のトランスジェンダー性を強調した。英語圏に比べると、日本の中

はなれたところにいる相手とコミュニケーションをとる方式は、少なくともこの二〇年の間に劇的に発展し変化をとげてきた。ネット社会の到来とともに誰もがその果実をたやすく得られるようになっており、少しの手軽な操作を身につけるだけで、語学を学ぶのに有効な素材、貴重な語音にも接することができ

る。従って、学ぶ者のモチベーション、好み、

都合や学び方、選択の幅なども急速に多様化すると同時に、伝えられる内容や情報が加速度的に陳腐化する事例を挙げることもそれほど難しいことではない。

「従来型」の語学教科書も、教育機関などで制度上の縛りをかけて販路を確保しないかぎり、いくら内容や使用メディアに工夫を尽くしたとしても、その斬新さを以て普及させる行いにはすぐに賞味

国文学研究は、ジェンダーやセクシュアリティのテーマの導入には総じて消極的だが、それはいささか残念なことだ。本書を契機にして、『紅樓夢』をジェンダー面から大胆に読み替える試みが続いていることを期待したい。

(ふくしまりようた 批評家・中国文学者)

張淑儀・上神忠彦編著
身につく広東語講座



A5判 304頁 (CD2枚付)
東方書店 [3150円]

期限が迫る。活字を通じて学び手に語学教材や情報を提供するという方法は、すでにその限界をすぎているのかもしれない。中国語の教育と学習をめぐる状況もほぼ同様のはずである。

張淑儀・上神忠彦氏の著わされた『身につく広東語講座』も、古典的な「従

来型」に属する広東語の教科書である。

しかしながら、学習者が自ら進んで学ぶ際に遭遇する諸問題を熟知し、発音面でのむずかしさ、語法面での疑問点などをしっかりと把握・整理し、わかりやすく配列し、受け手が「身につく」ことを主眼として貫いているという点で、異彩を放つ教科書でもある。

学習者にとり何が必要か、どのような説明が効果的かという視点のもと、長年にわたる広東語授業の実践の中でヒアリングを重ね、教育効果をよく点検し、確認して編集されたことがよく読み取れる。成立までのいいねいな経緯を充分にうかがうことのできる教科書でもある。隙なくデザインされた語学テキストと言つてよい。

その一端は、全二課のいずれの冒頭部にも「学習要點」が列挙され、学習目標が判り易く示され、さらに「I. 課文」、「II. 発音」、「III. 生字(新出単語)」、「IV. 語法」、「V. 練習」(1. 聴寫・音聲課文、2. 口頭翻譯、3. 問答・敘述練習)、「VI.

發展學習」が配置されることから知り得る。内容を組み合わせる有機的に学習できるほか、必要に応じて部分的な知識のみを得ることの出来る手引き書としても利用が可能だからである。

広東語を学ぶ際に、発音面で最初にマスターすべきヤマは声調である。広東語の声調は伝統的には九声調と説明され、これを聞いただけで尻込みする人も多い。しかしそのうちの「ㄟ ㄣ ㄛ」で終わるもの、いわゆる入声韻尾は語音の高さには直接かわらないため、声調から切り離せば六類に整理できる。六声調をマスターすれば十分なのだが、それでも普通話よりは二類多いため、依然として「むずかしい」と感覚的に思われがちである。だがメディアの発達した今日、所謂「言語圏」外に居住していて、完璧を期することは難しいとはしても、相当程度に身につけることが出来ないはずはない。

本書では、念入りに調整して録音された音声CD教材をヒアリング練習することとを前提にしつつ、六声調の感覚的な

「むずかしさ」をほぐすことにも配慮されている。声調を含む音系知識の全体を一気に読者につけるのではなく、各課に分散し、工夫を凝らして記述されている点からもそのことがわかる。また、たとえば四九頁「6. 広東語と北京語、古漢語字音の声調対応原則表」には北京語(普通話)と広東語の声調の違いが体系的に図示されており、概念を把握することが容易である。普通話の声調から広東語の声調を類推するための道標として使うことも可能である。

普通話の一声は広東語でも一声、二声は四声、この二点の把握は容易にできるだろう。次に三声であるが、広東語では二声または五声でいずれも上昇調になっている。普通話の三声「上声」は語頭子音に「ㄩ ㄛ ㄣ ㄤ」などを持つグループ「陽上」とこれらを持たないグループ「陰上」に分けられ、前者は広東語では五声、後者は二声に変化する。四声「去声」はこの「陰・陽」規則に合わないものもあるが、高低(三声・六声)の違いにも関

わらず、いずれも平坦調になる。また入声字については普通話ではその痕跡を見いだすことは困難であるが、日本漢字音を知るものは容易に把握できる。この点については四九—五〇頁に判り易くまとめられている。

また広東語発音の重要な特徴の一つに母音の長短、特に「a⁵⁵ a³⁵」の区別があるが、この点についても八五—八六頁に、言語史上の経緯をふまえて、普通話から出発して的確に記されており、学習者からみてわかりやすい説明となっている。

現代広東語での変調注記も著者の貴重な配慮である。例えば「錢 chin⁴²」(四頁)、「盒 hap⁶²」(五頁)、「前年 chin⁴²」(一頁)、「話 wa⁶²」(一八頁)、「鏡 geng³²」(一頁)、「傾偈 king⁴²」(七三頁)などは「普通後者で発音される」例、「舊年 gau⁶hin⁴²」(一七頁)、「枱 toi⁴²」(一〇六頁)、「郵(政)局 yau⁴ (zing³) guk⁶²」(一一〇頁)、「鵝 ngo⁴²」(一一三頁)などの場合は「よく後者でも発音される」例、ならに「dik⁴²si²」(一七頁)、「沙律 sa⁴lit²」(一

〇二頁)、「晒士 sai⁴si²」(一〇三頁)などの場合は「その語が外来語の音訳、あるいは口語性のつよい語で本来漢字を求索できないため、……その漢字の本来の声調と違うもの」の例として注記されている。全篇を通じて記述されるこの三種類の変調注記は、香港広東語を母語とし、さらにこの問題を詳細に研究している著者にして始めて実現できる作業であり、その結果を享受できる学習者は学んだ広東語発音に自信を持つて発話できるだけでなく、広東語音の研究を志す者にも貴重な資料となるはずである。

声調を修得する面でもよく工夫された例として「第二課二頁II発音」を挙げてみよう。ここでは「(0) 1・3・6・4 声、1・1・1、Ni¹ go³ hai⁶ tau⁴、呢個係頭。1・1・1、Ni¹ go³ hai⁶ hai⁴、呢個係鞋。」と徐々に低くなって末尾が最も低く終わる文例からはじまり「(2) 1・3・6・6 声、1・1・1、Ni¹ go³ hai⁶ min⁶、呢個係面。」(3) 1・3・6・3 声、1・1・1・1、Ni¹ go³ hai⁶ gok³、呢個係脚。」……(6) 1・3・6・2 声、1・1

1・1、Ni¹ go³ hai⁶ sau²、呢個係手。」で終わる六つの練習文型は第三音節目、すなわち「1・3・6、1・1」までが共通で、しかも平坦調であるが、最後の音節のみ声調が異なる。この配列を繰り返えし音読することにより、学習者は「1・3・6、1・1」声調の間の違いを修得すると同時に、末尾音節の声調(音高)との違いを知ることでもある。同様の工夫は「第三課三六頁II発音」「第四課五三頁II発音」にも用意され、順を追って声調(音高)の違いを着実に身につけることができるように配置されている。

普通話でも同様であるが、声調の修得過程で大切なことは個々の絶対値だけを練習することではなく、他の声調と組み合わせるその相対的な音のちがひ、聴覚上の差異を知ることである。音の高低や上下に曲がりくねる語音調子の違いは、他の音節と組み合わせて反復ドリルすることによりはじめて身につけることができる。そのために本書では視覚と聴覚の両面より懇切丁寧にその声調練習教材が

準備されている。

さらに第一課の「無気音と有気音」にはじまり、第二課・第三課・第四課の「声調」第五課・第六課の「母音・韻尾・韻母」、第七課「声調の組み合わせ」、第八課・第九課「声母 $g : n : ng$ 」と「母音 $a : \bar{a}$ 」、第一〇課「二音節（おもに動詞句）、三音節」第一課「母音 $a : \bar{a}$ 」と「韻母 $ui : \bar{ui}$ 」[ong : ung] [in : ing : eng]、第二課「辨調：声調の区別」まで、本書を構成する全一二課のそれぞれに発音練習が準備され、順を追ってその肝心なポイントを修得するように工夫されており、広東語の声調修得にともすればくじけがちな学習者に対する、編著者の詳細な心配りを知ることが出来る。

人間の知性は物事の比較から育ち始める。本書の随所に注記される〔Ⅷ〕つまり「普通話」との比較についての記述も、この人間としての基本的な視点から出発しているのであるが、この処置はある程度中国語を学んだ者がさらに広東語を学び、理解するのに有益であると同時に、

普通話の語法を学ぶ者にも大いに役立つ。さらに言えば、普通話の語法をある程度学んだものが、全篇を消化することにより中国語の語法に対する視点と理解を広げ、深めることを可能にしており、本書の大きな特色となっている。

そのなかの僅かな例をここで挙げることは必ずしも適切ではないが、例えば一五六頁「動作によつてものが移動する先の人をいう」界 bag^2 では「動作行為の結果、ものを移動する先の人を示すときには〔Ⅷ〕のように介詞構造（給……）ではなく）動詞句のうしろに「界」の目的語としておく（……後略……）」と記述し「打电话界佢」「拎本书界我」「写信邊個？」「拎本书界我睇」等の例文を充分に挙げると同時に「もしも〔Ⅷ〕の語順のように「界我打电话」といえば、許可使役の意で、わたしに電話をかけさせて」ということになってしまふ。」という記述に接すると、普通話の語法のみを知るものには想定外の驚きと好奇心を起こさせることになる。

広東語は普通話あるいは北方の官話方言にくらべて語氣助詞が豊富なことでもよく知られている。一三頁では「普通話以上に発達し、文末に多用されること」、「その（語氣助詞）の声調（音高）は、前音節の声調の影響をうけにくく、連音の状況が普通話などとは異なる」ことなどを指摘すると同時にその例文を豊富に示している。学習者だけでなく漢語方言に興味を持つ者にも貴重な記述になると思われる。

またたとえば八〇頁の、広東語学習者が疑問に思うことの多い「講 $gong^2$ 」と「話 wag^2 」の違いについて、前者は動作性が強く「動作そのもの（やその有無）をいうときに多用する」のに対し、後者については「話す、いう」といった動作性が弱く、主に、いった内容を導くに多用される（Ⅷ白話の「道」、さらに古文の「曰（いわく）に似る」という記述も、全篇に見られる豊富な語法記述の中のはんの一例であるが、中国語史における白話の展開、あるいは広東語の成立にもか

かわる射程の広い問題を背後に据えての解説である。

このように音韻面、語法面での中国語史に由来するマクロな視点に沿った解説や、詳細な語法分類には「後生仔」として学ぶべきところが多い。本書は「教科書」の体裁を採用しつつも、実質的には広東語の「語法書」あるいは「文法書」になっていると言っても言い過ぎではない。

中国語は実のところ大きな多様性を内包している。二〇世紀中葉にはじまった「推普」つまり普通話推進政策は、二一世紀の今日も中国政府の重要な言語政策である。最近二〇年の中国社会の大規模な変動と、メディアの著しい発展にともない、普通話という規範的中国語は中国語の長い歴史の中で稀に見る成果を収めつつある。しかしながらその成果は地域によつては「双語化」つまりバイリンガル化をも引き起こしている。この問題は、普通話を身につけないと社会的・経済的にいいポジションにつけない少数民族地域では深刻な対立の起因の一つとなつて

いるが、広東語や呉語、閩語などの大方言地域では、言語の二重構造をもとに生じている人びとの地方意識が行政面での「上有政策、下有対策」現象の一因となっているようにも思われる。

また世界中の中国人が規範化された理想的な普通話を使っているわけではない。さらに言えば、普通話には学習面でもつねに現実と少し距離のある理念的な側面も伴っている。漢字という字面で覆われているために言語の構造方面に予測のむずかしいことも多い。それらの点こそが学習者や研究者の知的好奇心をかき立てるのであるが、日本語のように「一枚板の」に捉えらると、文化の総体としての中国語の理解が不十分になることだけはつきりしている。その多様性を知る端緒として、普通話と広東語の違いが持つ音的差異、あるいは語法や意味上の違いを詳細に記述し、その知識の把握が的確な語学力を獲得する際に重要な価値をもつことを、本書は読者に訴えている。中国語のもつ文化的広がりを見つめていく。

することで得られる一種の爽快感を読者に提供しているとも言えよう。

巻末(二三九―二六三頁)には各課の「課文」および「V・練習(一・聴寫・音聲課文)」の日本語訳がつけられている。これも著者の配慮のひとつであるが、学習者あるいは教授者にとり極めて便利な処置である。学習者は「課文」の日本語訳を見ながら、口頭で広東語を発話して定着を図ることが可能であるし、ボイスレコーダーで自己の発話を録音して、付録のCDと対照・確認することにも利用できる。教授者もこれに類する方法を工夫することができよう。

「聴寫」についても「正解」を附さず、文字通り「日本語訳」のみが収録されている。正解は該当する「課文」や「生字」だけでなく、次に配列される「発展学習」やすでに学習した以前の課、あるいは次課の「課文」や「生字」などから探し出すよう工夫されている。例えば第一〇課、「聴寫」に使われる「界心機」は同課の課文にも使用されるが、はじめに学習す

るのは第八課であり、同様に「大聲吶、細聲吶」はどちらも一つ前の第九課の「補充語彙」（二五八頁）に使われている。復習をかねての配列であるが、正解に辿り着いたときの達成感・発見感こそが学習者の喜びであると同時に「身につく」学習の醍醐味であるという、学習者の立場を熟知するが故の処置でもある。「正解不掲載」は著者の語学教育についての「ゆずれない哲学」を明示している。

どんな教科書でも該当分野の知識・情報を体系的に編集し、受け手側に網羅的に伝えることを目的としているはずである。だからこそ伝える側の知識・技量、あるいは人格そのものがダイレクトに問われることにもなる。ともすれば「あれも知ってる、これも知ってる！」と言わんばかりに、「受け手の評価」を度外視して刊行されることが少なくない中で、『身につく広東語講座』は学習者が遭遇すると予測される問題点をよく知り、誠意を込めて克服する手順を提供した、という点で高く評価出来る教科書で

ある。長年にわたり中国語の語法を通時的あるいは共時的に止むことなく研究して来られた著者にしてはじめて実現した教科書であるとも言える。

もちろん説明の分量があまりに多く、読者に一種の暑苦しさを感じさせる箇所がないわけではないが、それは先にも述べたとおり、本書が「教科書」という体裁をとった「文法書」であるが故に生じる問題であり、使い方で解決できるところである。広東語研究書として今日もその価値を失わない趙元任氏（二八九二—一九八二）の『粵語入門』（Cantonese Primer、一九四七年刊）も、一九四二年にハーバード大学で開かれた一二週に渡る広東語講座用の「教科書」として編まれ、その後『國語入門』（Mandarin Primer、一九五五年刊）として展開したことはよく知られている。学習者の立場を編纂の出発点として、教材自体とその配列を詳細に検討している点も趙氏の第一作を髣髴とさせるが故に、著者による第二作、つまり『身につく中国語講座』

が続刊されることを願うのは評者だけではないだろう。

付録CDの音声教材は張淑儀氏みずからが吹き込みを担当しておられるため、学習者の問題点を把握し微妙な違いがわかるよう行き届いた内容になっている。末尾（第二課、一三五頁）の広東語民謡「月光光」もご自身で歌われており、編集に際しての暖かい精神を知ることができる。音声インフォマントとして協力された二人の香港人留学生にも念入りに発音指導されていたとこのことで、学習者にとっては明瞭で判り易い。さらに音声の録音工程に終始協力されたS氏は「月光光」のギター伴奏をも担当されたことと伝えられるが、本テキストの下敷きとなった『綜合広東語』のデータ編集と全体の版設計・加工などに終始尽力されたもう一人のS氏、それにイラストを書かれた教え子のTさんを含め、周囲の方々の献身的な協力があった始めて実現したという点でも、従来型のものと一味異なる、価値ある語学教科書であり文法書である。

（やはなし・あきふみ 京都産業大学）